随想

デジタル画像

郷原憲一（医師）
'45年中学校（旧制）卒業

FM8に始まった趣味としてのコンピュータとの付き合いが、WINDOWS95を働かせる処まで来た時に、その新しい能力を如何に使いこなそうかと考えていたところへ現れたのが、漸く使い物になるまでに進歩してきたデジタル・カメラでした。日進月歩のデジタル・カメラの中から選んで今なお愛用しているのがソニーのマビカです。今では市場に一五〇万画素という高画質のカメラが出ているのに、三五万画素のマビカに留まっているのは、メモリーやズーム・レンズで優れている他に、Eメイルやホーム・ページに使うのには、この標準画素数のカメラがかえって便利だからです。しかしプリンターから大きく刷り出す段になると、四倍もの画素数のある高画質カメラには及びません。私のプリンターはA4サイズで京都とその近辺、海外の風物詩や季節の花々などを撮ってきて刷り出し、待合室をギャラリーと称して見てもらっています。九枚が展示出来、各画像の下には短歌（らしきもの）を添えて説明代わりにしていますが、これがまた意外に好評で、私はただ三十一文字になるように書いているだけなので、いささか面映ゆいことです。

他方、インターネット上でEメイルやホーム・ページに画像を載せる時、圧縮という技術を使って画素数を小さくします。画像を送ったり受け取ったりする時間を短縮するためです。圧縮度を上げると時間は短縮されますが、画像の質は低下しますので、時間と画質を天秤に掛けながら許容される点を模索するのです。Eメイルでもホーム・ページでも音声を送ることが出来ますが、音声は情報量が極端に大きくなるので、そう簡単には使いません。メイルの文章を一とします と画像が数十倍、音声は数百倍という情報量になりましょうか。私は画像の方からインターネットに入って来ましたので、他の人に比べると画像を多用する方です。欧米の友達で画像を添付してくる人は少なく、日本のようにデジタル・カメラは一般的ではありませんので、スキャナーで読み込んで送って来ています。これもデジタル画像を得るための一つの方法なので、私もよく使いますが画素数が大きくなるので圧縮に一工夫必要です。もう一つ、デジタル・ビデオ・カメラから静止画像を取り出す方法があります。デジタル・カメラの弱点であるシャッター・チャンスを捉えにくいのを補えますし、高倍率のズーム・レンズ、メモリー容量等で多くの利点を持っています。ビデオはテレビに支配されますので、高画質の画像は期待できませんが、インターネット上には十分な画質を得ること

は出来ます。

このように各種の電子機器を駆使して、どうすればインターネットや作品展などのために、より良い画像を得ることができるかを日々研究しているのです。

ひとりごと

池田良則
（洋画家）
'69年高等学校卒業

秋の或る日、観るともなしに観ていたニュース番組は競馬のビッグレースを映していました。ギャンブルには興味を持たないのでその本命と目される馬の名は覚えていませんが、集団を引っ張って走っていたその馬が急にスローダウンしコースを外れるとやがてレースを棄権してしまいました。コースの脇で立ち停った馬は転倒した訳でもないのに脚の骨折との事で競走馬としての役目を終え即刻安楽死、つまり薬殺されてしまったとの事です。私には釈然としない思いが残りました。人間の金儲けと娯楽の為に人工的に造り出された競走馬、健気に全力疾走した馬が役に立たなくなったといってすぐ処分される。近頃の人間社会を見る様です。まだ希望退社を勧められる人は幸せで、突然薬殺される様に国や銀行や会社から斬り棄てられる事態も珍しくなくなって来ています。つまりは金を稼げないものは役に立たない、役に立たないものは必要がないという事。競走社会の原則でしょうが、景気の良い時は鞭を入れて稼げるだけ稼がされ、景気が悪くなると自分の脚を引っ張ると、立場の強い者の判断で弱い者を斬り棄てる。効率だけで考えられてはあんまりです。今までは社会の少しでも良い位置につける為、良い就職、良い大学、その為には良い高校、更にその為に良い中学、その為には当然小学校では塾通いという言わば子馬の頃からの競走社会であった。ある意味では横並びのレースであったが、今や本当のサバイバルレース、脱落せずに最後に立場の強い者になったが勝ち。骨折しないで最後まで全力疾走しないと薬殺ではたまりません。何の為に生きているか判りません。力のある者は横柄さを増し、力無い者は卑屈になるか犠牲を承知で抵抗するかです。何かに生かされている自分、色々な素質をもった個人個人がそれを活かせて、出来れば日々心安らかに生きるのが本当であるでしょう。その自分を見付ける大切な時間が十代から二十代に至る学校生活の間ではないでしょうか。それがいつからか物質消費文明、経済優先拝金競走社会に学校という場が呑み込まれ、今やその片棒を担いでいる事すら気が付いていないのではないでしょうか。例えば同志社という日本では伝統ある私立学校も、建学の精神や理念、教育の豊かさや見識は片隅へ追いやられ、企業経営に重きを置く様な状況になっていなければ良いのですが……。

フェミニストカウンセラーとして

井上摩耶子
（ウイメンズカウンセリング京都代表）
'61年大学文学部社会学科卒業

私は、十六人の仲間とともに、女性のための女性によるカウンセリングルームを京都で開業している。

フェミニストカウンセリングとは、簡単にいえば、フェミニズムの視点に立つカウンセリングである。さまざまな心理的問題に悩む女性たちが、女性の自由・平等・人権を手にする方向で、それぞれの悩みや問題を解決することを目標としている。

フェミニストカウンセリングならではのテーマのひとつに、性暴力の問題がある。強姦、セクハラ、ドメスティック・バイオレンス（夫・恋人からの暴力）、児童期の性虐待といった問題が、近年やっと社会問題化してきた。被害者の女性たちが、沈黙を破って語りはじめたからである。

三十年前、大学院でドロシイ・デッソオ先生からカウンセリングの手ほどきを受けていた頃、デッソオ先生が開設されていた「葵橋ファミリー・クリニック」に、性暴力をはっきりと訴えてくる人はいなかった。

これは、男―女関係における大きな変化だろう。それだけ女性の人権が認められてきたわけだ。

私は、現在、性暴力被害者のカウンセリングをし、また性暴力裁判において、性暴力被害者を代弁して意見書を提出したり、専門家証言をしている。裁判所に対して、性暴力とはどのような犯罪なのか、また被害者は性暴力に直面したとき、どのような心理状態になり、どのような対処行動をとるのか、さらに性暴力被害者の心の傷（「心的外傷後ストレス障害」）などについて証言する代弁者活動である。

これまで沢山の性暴力裁判に関わってきたが、裁判長も弁護士も男性ばかりというまだまだ男性中心の法廷は、女性被害者にとって非常にストレスが高い。傍聴席の私までもが、「なぜあなたたち男性は、そんなにわからないの?」と怒りと悔しさの感情にさいなまれることがある。

そして、男―女関係のわかりあえなさを再確認し、あらためて男女の対等性や男女共生のむずかしさを思う。

こういう話をはじめると、必ずなぜそんなに「女であること」にこだわるのと尋ねる人がいる。しかし、私は「女」にではなく、人間の「対等性」あるいは「差別意識」にこだわっているのだ。

「人間としてみんな同じだけど、違いがあるね」という道筋によってではなく、「女、男、障害をもつ人、在日朝鮮人であること…、それぞれに違っているけど、人間として同じだね」という道筋によってしか、差別は解消されないのではないだろうか。そして、差別を受けている側が、まず自分にこだわり、自分のことばで、自分を語る必要がある。

カウンセリングという手法を使って、自己変革を実現すると同時に、社会変革をも目指すラジカルなフェミニストカウンセリングに行き着いたのは、私が同志社という自由なキャンパスで青春時代を過ごすことができたからだろうと思っている。

「四条」「七条」はどう読むのか

顧　海根
北京大学教授（女子大学交換教員）

今回私は北京大学と同志社女子大学との学術交流協定にもとづき、交換教授として派遣され半年滞在することになっている。講義・研究の余暇を利用し、あちこちを見学したりして、京都文化の特徴や、日本文化と中国文化とのつながりの深さへの認識を一層深められたのだが、紙面の都合により、京都に来たばかりの頃、目に入ったその一部の地名の読み方について気が付いたことを二、三述べさせていただく。

京都市内の地名はいろいろ特徴がある。その一つに、一条、二条……九条、十条というように、数字の順番で命名する地名

がある。最初地図を見たら、すぐ中国北京市内にある同じ名前の地名が頭にちらっと浮かんできて、ここからも、日本文化と中国文化とのつながりの一端がうかがえるなあと思った。

ところで、これらの地名のうち、「四条」「七条」「九条」は、一体どう読んだらいいのか、ちょっとためらう。これという自信が持てない。というのは、日本語の数字は読み方が厄介で、特に「四」「七」「九」がそれだ。「四」は音読みが「シ」で、訓読みが「ヨン、ヨ」だ。「七」は「シチ」という音読みに対し、「ナナ」という訓読みがある。それに「九」は「ク」と「キュウ」という異なった音読みがあるのだ。

中国の日本語教育では学習者に漢語の数詞を教えるとき、下記の二項目にかかさず説明を加える。(1)漢字「四」と「七」の音読みは発音が似ていて聞き間違いやすいので、その紛らわしさを避けるために、よく「シ」を訓読みの「ヨン」あるいは「ヨ」と言い換え、音読みの「シチ」を「ナナ」と訓読みすること。(2)漢字「四」「九」の発音は縁起のよしあしにかかわる。例えば「四」の音は「死」と同音、「九」の「ク」は「苦」に通じること、ということだ。そういうわけで、「四条」は一体「シジョウ」か「ヨンジョウ」か、「七条」は「シチジョウ」か「ナナジョウ」かちょっと迷っていたのだ。後に地元の方に聞いたら、「四条」は「シジョウ」で、「七条」は「シチジョウ」だった。要するに、「ヨンジョウ」「ナナジョウ」とは言わないのだと言われた。

ところが、京都市では、実際その「四条」「七条」は「ヨンジョウ」「ナナジョウ」と呼ぶこともあるようだ。丸谷才一氏の『日本語相談』によると、京都の市バスでは乗客に「次は河原町ヨンジョウ（四条）」とか「烏丸ナナジョウ（七条）」とかいう車内放送があるという。私も市バスの中で「ナナジョウ京阪前」と聞いたことがある。おそらく先に指摘したように、よその土地の人の便宜を考え「四」と「七」の区別をはっきりさせる親切な配慮から使っているのだろう。これは一外国人としての私にはありがたいことだが、一方、これによって地名の読みに混乱をもたらしかねないことがあるのではないだろうか。

つぎに、先に触れた地名「烏丸」の発音だが、最初この地名を見た時、「カラスマル」と、すこしもためらわずに自信をもって読んだ。地下鉄や市バス内の車内放送もそのつもりで聞いていた。後で、「烏丸」の読みは「カラスマル」ではなくて、「カラスマ」だと分かり、おやっとびっくりした。「烏丸丸太町」のように一つの地名の中に並んだ二つの同じ漢字が「烏ママル太町」とそれぞれ異なった発音をするのはおもしろいものだ。でも、「烏丸」を、正しく読めないのは私一人だけではなかったらしい。宇野義方氏監修の『日本の漢字』によると、「よその人が『京都の烏丸通』を『カラスマルー』と読む人も多いが、土地の人は決してそういわない」と書いてある。一方、全国地名辞典などを調べると、「烏丸」は江戸時代前には「カラスマル」と読んでいたようだ。

ちなみに、いま私が泊まっている宿泊地「向島（ムカイジマ）」をよその地方の方が「ムコウジマ」と読むのを何回か聞いたことがある。日本の地名（人名も）の読みはほんとうに難しいものとあらためて感じた。

出版五十年におもう

杉田信夫
（ミネルヴァ書房代表取締役会長）
'43年大学法学部経済学科（旧制）卒業

おかげさまで、昨年九月、当

社ミネルヴァ書房は創業五十周年を迎えることができました。かえりみれば、昭和二十三年、北白川で文字通り机ひとつ、電話一本で出版の仕事をはじめてまさに半世紀、「歳月人を待たず」と申しますが、あっという間に五十年が過ぎていきました。

かつて「出版は京都に育たない」というジンクスがありました。物流にも情報にもさまざまなハンディをもつ京都に見切りをつけて東京へ移ってしまった出版社も数社にとどまりません。「継続は力なり」といいます。当社のあゆみはまことに非力ではありますが、このジンクスへの挑戦の五十年であったように思います。おかげさまで、平成元年、出版社に与えられる日本で唯一の賞である梓会出版文化賞を関西ではじめていただけたのも、このジンクスへの挑戦に対する励ましではないかと受けとめています。

京都は日本の出版業発祥の地であり、十七・八世紀には出版文化の成立と発展の中心地でした。それが、明治以降の東京一極集中化の流れによって、出版の分野でも京都は東京に大きく遅れをとっております。

欧米諸国をみると一国の各地に特色のある出版社が散在し、首都以外にも異色の出版社が数多くあります。

先日、京都大学のある先生から、「私はオックスフォード大学の客員研究員として、都合一年間かの地に滞在しましたが、京都よりも小さくて人口も少ないあのような町に、オックスフォード大学出版局とブラックウェル書店という世界に発信する大出版社があるのを見るにつけ、京都はもっと頑張れる」というたいへん心強いお便りをいただき、意を強くしました。

一国内に違った発信基地をもつことは、二十一世紀日本の発展のための大きな課題になるものと信じております。

当社は創業以来、人文・社会科学と福祉の二つの柱を軸として出版をつづけてまいりましたが、創業五十年を機として、さらにユニークな書物の出版に努力していきたい所存です。

わたしは昭和十八年九月、同志社大学を卒業しましたが、戦中の学徒出陣前の慌ただしいなかを追われるようにして出ました。それでも同志社に対する思いはいまも強く尾をひいています。加齢とともに毎年、先生と友人を失います。戦後もご交誼をいただいたジョン・ホール先生が一昨年亡くなられました。昨年も人間形成の上で影響を受けた同期の恒藤武二君（同志社大学名誉教授）、中村泰夫君（我楽経営）の二人が申し合わせたように亡くなられ、大変残念に思っております。

炭やきをして見えてくる共同体の姿

竹澤玲子
（美山総合木炭生産組合〈天狗松〉代表）
'59年大学文学部社会学科卒業

夫の生家である京都府の山村、美山町で「炭やき業」を営んで七年目を迎えます。ことさら「炭やき業」と名乗るのは、趣味でなく、生業としていることにこだわるからです。財政的には赤字ですが、いまどき米でも野菜でも、作って利益を上げている農家など無いに等しいのですから。

実のところ、最初は私も深い谷を抱いた山並みや、季節が廻るたびに新しい装いを凝らす木々に惹かれて、「美山で炭やきでもして遊ぼうか」とやってきたのです。

里山に踏み込んでみて、どの山にも谷にも名前があり、至る

所に祭られている神々に見守られて、里山の林道は奥深くまでのびていることを知りました。近年忽然と現れた山頂を走るゼネコンがらみの公益林道などとは異なり、集落の人々が「日役（ひやく）」と呼ばれる共同作業で造り、維持してきた林道です。日役は集落構成員の義務的な労働提供で、林道だけでなく山から谷、水路から水田、ついには河川敷まで、集落の全てを潤しています。日役に出るようになって、山や川がかろうじて美しい姿を保っているのは、山村共同体があり、村人の日役が続けられてきたからだと解ったのです。その山村共同体も今、過疎化と高齢化により瀕死の状態です。里山で炭焼きを始めた私にとりあえず出来ることは仕事としての炭焼きを取り戻すことです。昔取った杵柄で高齢者も賃金を得ていくこと、更に若い人も新たな森林に関係する仕事を開発しながら山林を生かした生業の場を増やす必要があると考えるに至りました。

一方、村の一員としての付き合いは、首をかしげたり、負担になることもあります。公民館行事に愛宕講が組み込まれていたり、檀家としてのお寺の維持、いくつもの神社の氏子になっていて、それぞれに労働奉仕や維持費の負担が課せられていることです。

「出る釘は打たれる」式の風潮も残っており、私たちの出来たばかりの木炭生産組合も例外ではありませんでした。炭やきにも適用される補助金を府と町が組んでくれたのに、何と町議会が予算の組み換え動議を出し、折角の補助金はお流れとなったのです。反対理由は組合の名称が大袈裟であり、半数以上が新しく移り住んできた町民であることのようです。

美山町で一度は消えていた炭やきの煙もここ二年の間に四基の窯が作られ、我がテングタロベエ窯と共に稼動しています。体験を求めてくる若者の姿も増えて、特にこの二年間、大学経済学部室田ゼミが当方で炭やき体験を実習して下さっていることは大きな励ましとなっています。また、学術的に炭の浄化能力が数百年に及ぶことを証明した海外の研究が紹介されている室田武氏の論文にも勇気付けられました。欲を言えば、京都大学農学部森林・人間関係学研究室の美山町での調査結果も含め、研究機関が連携して山村再生の導きの星となってくださることを期待しています。

珍香もたかず屁もひらず

田村勝太郎
（神戸市立舞子小学校教諭）
'65年大学法学部卒業

教育の現場にいると、子供達の問題行動がマスコミで大きく報道されるたびに心が痛む。なぜ何がと自問自答する。

子供達の問題行動を取り扱っている書では「・・症」という言葉とその概念で子供の問題行動を括ることが氾濫しているように思われる。

病であるなら医者に任せるより方法はない。病にならないように子供が自己管理すべきならば、私達大人はそれぞれの立場と場においてサポートすればいい。そうすることは、マスコミの話題になっていない子供達に目を向けることにもつながる。

私が日々接している多くの子供達は、いわゆる子供らしくいろいろなことに頭を突っ込もうとし、試行錯誤しながら成長する姿を見せてくれる。このような子供達と動植物の世話をする機会が多い。その中で

「雨が降った後にも朝顔に水をやる」

「パンジーに毎日さようならの挨拶をし握手をする」

「野菜をみじん切りにしてウサギに与える」
「ウサギの体が汚れてきたといっては、シャンプーしドライヤーで乾かす」
「生まれたばかりのウサギの赤ちゃんを親から引き離し哺乳ビンでミルクを飲ませる」
など、思いもかけない行動を見せることも多い。この不自然さは、自分たちの行動様式を相手に当てはめるのがいいことだと考えているからだろう。また、大人たちの片寄った嗜好を投影しているのかもしれない。これは、都会で生活する者が自然界からだんだん離されてきた結果でもある。それでも、子供達は草花、虫、小動物など命あるものとの係わりを求め、それを大切にしている。心を込めて世話をしていた生き物が死んでしまった時に悲しみ嘆く姿には慰めようもないこともあった。墓を作り、花を供え、帰りには合掌している子供達もいる。

このような経験で、生き物の暖かみと命の大切さを感じ取るのだろう。

私が日々出会っている子供達は、よくも悪くもマスコミの話題にならない。こんな声なき子供大衆は、「・・症」にも陥らないで、大人たちの過大な期待や放任という棘に刺されながらも精一杯生きている。

声なき子供達の声をだれが広めてくれるのだろうか。

山崎貞一氏のこと

山崎舜平
（半導体エネルギー研究所代表取締役社長）
'71年大学大学院工学研究科修了

同志社大学の大先輩である加藤与五郎先生の一番弟子の山崎貞一氏（享年八十九歳）が去る十一月二十日に亡くなられた。氏は、TDK株式会社の社長・会長・相談役をされたのみならず、公益のために数多くの仕事をされた方である。

私は、加藤与五郎先生が設立された創造科学技術研究所で大学二年以来の数年間を研修させていただいた。その研修期間中に氏は毎年お出で下さり、私たち学生を鼓舞激励してくれた印象深い方であった。告別式の折は、胃痛のあまり、意識を失わんばかりに悲しかった。

私は氏との三十七年間のつきあいで、二回厳しい指導をうけたことを記憶している。

その一つは、TDK株式会社を辞めようと思い、会長室に相談に行った時のことである。この時氏は、

「君はところで相談に来たのかね。それとも報告に来たのかね。もし報告ならば時間の無駄であるから帰ってくれたまえ」と、えらい剣幕！

「今後偉い人に物事の話をする場合は、相手の時間を失敬しているのだから、ご迷惑をかけていることと考えなさい。君がTDKを辞めるのは分かった。しかし、在職中に使った研究費は全て返しなさい。TDKにも協力させるから」と。

それからが大変！自分の学生時代から退職までの十年近くの間に為した発明百三十件の特許出願を何としてでも特許にして第三者からロイヤリティをもらわないと研究費を返すことができない。普段はサラリーマンの生活があるから、休日の仕事である。毎週土曜日、TDK担当者が拙宅に来られ、夜まで特許取得に明け暮れ、数年に及んだ。本当に毎週の休日にである！！

他は、私が一昨年五十四歳で紫綬褒章を頂いた時、氏のお宅をお伺い致し、報告した時のことである。いつもは一時間ぐらいで失礼するのであるが、この時はいつまでたっても、黙って聞いておられるばかりである。失礼なことはなかったはずだったが、数十秒の沈黙が何回もお

とずれた。ふと、
「私も加藤与五郎先生のご指導でここまで来られました。これからは若い人の育成を全力で致したく考えております」
と申し上げたところ、
「その言葉を君が言うのを待っていた」
と、一言。そして、
「今日はわざわざお出で下さり、ありがとう」
と深々と頭を下げられた。
氏は加藤先生の教えを実際に自らに気付かせ、また、行わせることを通じての本当の教育者であったように思う。
大学教育とは、何をすべきか。すぐ「知識」、「情報」という人は多い。しかし、人としての歩み方を一対一で一つ一つ体をはって気付かせながら教えて下さる人生の先生は多くはいない。氏は私にとり、まさに師であった。
加藤先生を本当に心底から慕っておられる弟子は多い。それは心の琴に触れた教育を先生がしておられたからであることを氏は思い出させてくれた。

玄界灘を眺めながら

王　相殷
（協成海運代表理事、韓国総同志社大学校友会会長）
'41年同志社高等商業学校卒業

私の事務所は釜山港が一望できるビルの十三階にある。
歳末の慌ただしい或る日、釜山港には多くの貨物船に混じって最近就航したばかりの関釜フェリー〝はまゆう〟が優雅な船体を見せている。まもなく八十歳を迎える私は、その颯爽とした姿と、青春時代玄界灘を越えて旅立った私の姿を重ねてしばしの思いにふける。
同志社に入学したのは一九三九年のことだ。憲法の田畑忍先生や経済原論の北野熊喜男先生らの薫陶を受けるかたわら、ひたすら英語の学習に没頭し、ドラマを演じたり、全同志社バートレットカップ英語弁論大会で一等をもらったりもした。幸いなことに英語ができたので、外国人に京都市内の観光案内をしたのも追憶の一こまで、比叡山に上ったり、琵琶湖で遊ぶなど今でも京都の地図ははっきりと頭に残っている。
一九四一年に卒業、大阪中之島に本社を構える江商株式会社に入社した。江商は当時日本に於ける三井、三菱に次ぐ総合貿易会社であり商社マンとして入社出来た事は一つの誇りでもあった。一九四四年の秋まで本社に勤務した後、ソウル支店に移りやがて戦争終結を迎えた。
同志社で学んだ学問をもとに江商での貿易、海運実務に関する勉強が私という人間をつくり、戦後は企業を起こし今日まで海運業を通じて国際的にまた国内で政界をはじめ色々な社会活動を支える力となった。
韓国は今、ＩＭＦ支援のもとで〈第二の建国〉をめざし、かつてなかった厳しい試練のただ中にある。一九八八年のソウルオリンピックのころまで、韓国経済の成長を支えた勤労意識が衰えたところに韓国動乱にもたとえられる経済破綻が起きた。韓国は日本同様資源のない国であり、経済立国のためには、この港から陸地に向かってでなく、広い海に目を向けることが大事であると思う。
日本では国際化、韓国では世界化ということが叫ばれており、それを口にしない者は時代遅れかのような風潮が支配的だが、思うに偏狭な愛国心を超越して品位と教養、それに謙遜の美徳を身に付けるべきである。母校、同志社は言わずもがな新島先生の精神の下、早くから国際主義教育を実践してきたのである。
過ぎし日々を省みれば、同志社で充実した青春の一時期を送

れたことが私の人格、人生を決定する力となったとしみじみ思い乍らも適切な感謝の言葉が見つからない。

冬の玄界灘は荒波が絶えない。だが、地底では半島と列島はしっかり繋っている。

シカゴにて

網谷正美
（高等学校教諭）

昨年は大阪市とシカゴ市との姉妹都市提携二十五周年に当たり、シカゴ市ではさまざまな記念事業が行われたそうです。その一環として、八月十日から十五日まで、茂山千之丞を団長とする大蔵流狂言の公演ツアーが企画され、はじめてアメリカの土を踏んできました。

「網チャン、八月は学校もヒマやろ、シカゴへ行ってくれへんか？」

千之丞師にこう言われた時、一瞬ケビン・コスナー主演の『アンタッチャブル』を思い浮かべ、ギャングたちがピストル片手にスラム街を徘徊する前時代的な情景がちらついたのですが、現実のシカゴは実に美しく平和な町でした。

オヘア空港からハイウェイを走ること四十分余り、左に涯ないミシガン湖の広がりを望み、右には映画『ホームアローン』の舞台となった緑の多い郊外住宅地を眺めつつ前方に目をやると、遠景ながら天に向かって屹立するような高層建築群がしだいに威容を増してきます。やがて市街地に入ると、周囲には壮大な石造建築がそびえ、さながら摩天楼の森の谷間を行く思いがしたものです。聞けば、これらの建築群は、一八七一年の大火災で市街地が焼失した跡に作られたそうですが、様式も意匠もそれぞれに独創的な建築群が、それでいて景観全体の中で見事な調和を保っている美しさに圧倒されました。郊外の住宅も、個々の家屋がその個性を主張しながら、町並みのハーモニーを産み出しているのです。このような建造物が現在も作られていて、今も生き続けるフロンティア精神を感じると共に、個が自己主張しつつ自ずと全体に融和するアメリカの「知」に思いを致したことです。

さて、肝心の狂言ですが、市街中心部にあるカルチュラルセンターと、ノースウェスタン大学ホールでの二回公演でした。プログラムは次の通りです。

二人大名　シテ大名　茂山千五郎
　　ツレ大名　網谷正美
　　道通り　茂山千之丞

棒　縛　主人　茂山千之丞
　　太郎冠者　茂山正邦
　　次郎冠者　茂山あきら

言葉が通じない外国へは所作だけでストーリーがわかる曲を持って行くので、この二演目も海外公演の定番なのですが、千人を超すアメリカ人観客は、心からうちとけて狂言を楽しんでくれました。観る姿勢が柔軟で、笑うべきポイントを外さないのです。ここでも、貪欲な好奇心に支えられ、柔らかい心で物事を受容しようとするアメリカの「知」を感じさせられました。

この公演の司会をしていただいたのは、シカゴ大阪姉妹都市委員会のカー氏という方ですが、氏は南山大学卒業後、大学院法学研究科の聴講生として同志社に在籍していたとの事。明るくフランクで、聡明な氏の人柄と風貌が、同じ同志社人というためか、シカゴの町をより身近に感じさせてくれたようです。

駅の美術館とフンデルトワッサー（Hundertwasser）

石川　立
（大学神学部専任講師）

十二月半ば、京都駅ビル内の美術館「えき」でフンデルトワッサーの展覧会を見た。以前からこの人には関心を持っていたので、田辺校地で授業を終えたのち研究室のある今出川校地に戻る途中、一時間ほど立ち寄ったのである。両校地の移動も、時間に余裕があって途中に立ち寄るところがあれば楽しいものになる。二つの目的地だけを見るのではなく、無駄に思われるその途上を積極的に見直してみるのも悪くないように思う。

駅の建物に美術館があるのは働く者にとっては有り難い。こなすべき仕事がたまっていると、関心を引く展覧会が市内で開かれていても、普段乗らないバスをわざわざ使ってまで見に行きたいとは思わないのである。そんな元気がない。しかし、駅の展覧会なら好都合である。気軽に途中下車してちょっと買い物でもするような気分で、美術館という非現実的な空間にしばし身を置くことができるのである。

フンデルトワッサーはオーストリアのウィーンを拠点として、世界各地で活躍しているグラフィック・アーティストである。日本に滞在して創作活動をしたこともある。展覧会では、各種の版画（木版、エッチング、リトグラフ、シルクスクリーン）による表現が私には面白いと思われたが、油絵や水彩画はもちろん、他にも様々な表現手段が用いられていた。建物による表現にも触手をのばしており、本拠地ウィーンには、実際、彼がデザインした異様なアパートが建っている。ちなみに、ゲイジュツ精神が燃え立つ奇怪なアパートに住んでいるのは民間人であり、彼らはごく普通の生活をおとなしく営んでいる。

美術館で求めたカタログにはフンデルトワッサーのメッセージがいくつか載っていた。そのうちの一つに「直線に神は宿らず」というのがあった。ゲイジュツ家がふと霊感を得て気まぐれに書き記した文句なのかもしれない。そう言えば、田辺校地最寄りの近鉄「興戸」から地下鉄「今出川」まではほぼ直線である。フンデルトワッサーのこの言葉を真に受けるならば、私は両校地間の直線の途中でしばし時間を割くくらいで満足していてはいけない、ということになる。両地点を移動するときは、もっと大きく道をはずれ、大小の円や無秩序な線を描いて行かなければならないのかもしれない。フンデルトワッサーとは「百水」という意味だが、百本に別れた水の流れは、さらに互いに離れ、また合流し、実に多様な模様を作るはずである。私の歩みも百本の水の流れのように複雑多岐であるべきだろうか。「美術館が駅にあるのは働く者には都合がよい」などと気取ったことを言っている場合ではない。故意にでも回り道をして美術館に赴き、様々な方向を向いた足跡によって、奇怪な模様を残していくべきではないのか。

フンデルトワッサーいわく、「美術館へ向かうあなたの足どりが描く線は、その美術館の壁面の絵の線よりも、はるかに貴重でまた美しい」。

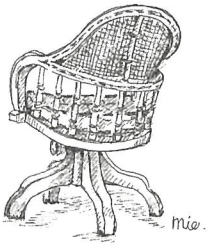
his childhood were sunnier and the skies bluer. When was this mythical past? Did it ever exist? When exactly did students read more?

It may well be generally true that students read less classical literature nowadays. Yet what does this tell us? It certainly does not mean that less learning is taking place, merely less orthodox learning. It further suggests to me that teaching methods and curricula are lagging behind the needs and desires of today's young people who have evidently become disillusioned with encountering other cultures through the painstaking translation of literary works. Perhaps the whole question of how and, indeed, why foreign languages and cultures are taught needs to be looked at with a more critical eye.

Just as young people in Britain and America in the 1950s and 60s asserted their needs over the prescriptions of the older generations, so young people in Japan during my ten years here appear to be opening up more and more to the world outside, and, as a result, expressing themselves more directly and honestly. It is surely time that the education system as a whole responded to this shift by enquiring into the needs of these students rather than dictating to them.

By the time my 20th year in Japan comes around I hope that the Ministry of Education and other educational decision-making bodies will have woken up to the pressing need for change. As I see it, three key areas in the teaching of language and culture that should be addressed: 1) the study of foreign languages (especially English, of course) should become an elective rather than a compulsory part of the curriculum; 2) English and other languages should be studied as living modes of communication rather than as arid exercises in grammar and translation and as a means to assess university entrance; and 3) students should be exposed increasingly to the many forms of living popular culture that speak directly to them rather than the products of so-called 'high' culture which manifestly have less and less significance for them.

With such changes I believe the interest of students in other languages and cultures could be fostered and encouraged rather than blighted in the bud as is so often the case now. Perhaps we should listen more to our students to discover how we may best serve them.



◆◆◆◆1999年度◆◆◆◆

同志社大学
公開講座のお知らせ

同志社大学では人文系・自然系各6回の講義を、学内外から毎回違う講師を迎えて行います。学生・一般の方を対象に来年度の受講生を募集いたします。受講料はいずれも無料。開催場所は田辺校地。詳細のお問い合わせは、田辺校地教務事務室(☎0774-65-7050)まで。

人文系(全6回)	『考古学に歴史を読む』—川の文化—	
日　程	講義テーマ	講　師
5月11日(火)	東アジアの川と文化 —黄河・長江・鴨緑江・日本の河川—	同志社大学名誉教授 森　浩一
5月25日(火)	朝鮮半島の川をめぐる古代文化 —鴨緑江から淀川・大和川—	仏教大学助教授 門田　誠一
6月8日(火)	西からの玄関、淀川の古代・中世	同志社大学歴史資料館学芸員 鋤柄　俊夫
10月12日(火)	大和川と大和	花園大学名誉教授 伊達　宗泰
10月26日(火)	平安京・京都の川	京都文化博物館学芸員 山田　邦和
11月9日(火)	古代王権と木津川	同志社大学歴史資料館学芸員 辰巳　和弘

自然系(全6回)	『人と自然』—創造の世界—	
日　程	講義テーマ	講　師
5月14日(金)	地球大気と航空機	元川崎重工航空宇宙事業部技術部長 柴田　眞
5月28日(金)	お酒とビール、よもやま話	キリンビール基盤技術研究所長 大野　寿彦
6月11日(金)	高脂血症治療剤メバロチンの開発と心血管系疾患の抑制	三共株式会社学術開発第一部長 駒井　享
10月8日(金)	人工肝臓—ヒトの肝臓にどこまで近づけるのか？—	京都大学医学研究科教授 山岡　義生
10月22日(金)	人工関節材料の昨日・今日・明日	同志社大学工学部教授 坂口　一彦
11月5日(金)	自己組織再生医療の現況と将来	京都大学再生医科学研究所教授 清水　慶彦

English teaching 2000

Robert CROSS
(大学言語文化教育研究センター助教授)

Recently I held a party with some friends to celebrate my 10th year in Japan. It was quite a surprise to realise that I had spent such a considerable part of my life here. Looking back, I can say that it has been a wonderfully enriching and enjoyable decade, full of personal discoveries. The anniversary caused me to reflect on some of the many changes that I have noticed in Japanese society during my time as a teacher here, and also on some of the things I would personally like to see changed.

One of the most striking changes for me, and one that I encounter every day on the Doshisha campuses, is a new and refreshing spirit of personal freedom and curiosity among students. It can be seen in the more individualistic style of dress and hairstyle, the increasing number of students who travel abroad, often alone, and in the conversations I overhear about the European art films currently being screened at the Minami Kaikan.

Even so I often hear disgruntled colleagues assert that our students are less industrious and enquiring these days than they were in the past. They read less, it is claimed, and they lack essential general knowledge. When I hear such talk, it reminds me of my grandfather who used to claim that the summers in